

# 女性起業家育成に向けた 能力開発を推進するための環境整備に関して

渡 部 美紀子

西 口 美津子

大 野 邦 夫

はじめに

1. 現代における女性の起業の意義
2. マトリックス履歴書と起業家育成モデル
  - 2.1. マトリックス履歴書による個人履歴の整理
  - 2.2. 起業家育成モデル
3. 「起業」と「能力開発」についての本学学生へのアンケート結果  
—西口ほか (2017b) との比較—
  - 3.1. 回答者の仕事とキャリアに対する意識
  - 3.2. 起業に必要な能力開発
4. 宮城学院 OG からの意見
5. 世代の違いによるアンケート結果の総括
6. 起業家育成のための能力開発を推進するための環境  
むすび

はじめに

移り変わりの速い現代にあって、社会に要請されるもしくは消費者が求めるニーズも多様に変化しており、企業を取り巻く環境やビジネスモデルもまた不変ではない。企業は、変化に対応できる適応力を求められ、その適応力を擁している企業だけが生き残っている。衰退していく産業や分野のサイクルも早く、個々の商品・製品のプロダクトサイクルもいずれ衰退期を迎える。常に起業を志す若い世代がいなくては、社会全体が衰退していくことになる。ことに結婚や出産などで離職することの多い女性の潜在的能力を発揮できる場としても、起業に対する期待は大きい。

地域に根ざした中高年女性の起業に関しては、『女性のための起業マニュアル—未来は自分で切り開く—』（西口ほか (2017a)）を作成し、共同研究者とマニュアル作成過程で得た知見を西口ほか

(2017b)においてまとめている<sup>1</sup>。本稿においては、この共同研究の一部として、いわき市の中高年女性に対して行った「社会人の『起業』と『能力開発』に関するアンケート調査票」のフォーマットを用い、本学現代ビジネス学部現代ビジネス学科の学生に同アンケート調査を行って、「世代」による差異を検討する。さらに、本学同窓会を通じてOGに対してもアンケート調査を行うことで、補足的な情報を得るとともに、現在の学生に対して望まれる将来のための学びについての見解についても集約する。

以下、1.において、現代における女性の起業の意義について考察する。2.においては、本稿アンケート調査の基本的な考え方を示すため、マトリックス履歴書と起業家育成モデルについて説明する。3.において「起業」と「能力開発」についての本学学生へのアンケート結果を、西口ほか(2017b)と比較することによって検討し、宮城学院OGからの意見を4.において集約する。5.では、世代の違いによるアンケート結果を総括し、6.において起業家育成のための能力開発を推進するための環境についてまとめ、むすびにおいて内容を要約する。

## 1. 現代における女性の起業の意義

少子高齢化、生産年齢人口の減少という日本の現状において、女性が期待されている役割は大きい<sup>2</sup>。なかでも、女性が多様かつ柔軟な働き方をする上で、「起業」は有効な就労促進の手段となる。

図表1は各国の年齢別女性就業率を、図表2は日本の女性の職業別による就労率の違いを表している。図表1で見ると、日本の女性就業率は、結婚や出産期にいったん低下し、育児が落ち着いた時期に再び上昇するM字カーブを描くのが特徴的である。図表2においても、女性の被雇用者は20代をピークに減少し、50代で落ち込んでいるが、起業（自営業者）ではそれが見られずむしろ、定年を迎える年代になっても仕事を続けていることがうかがえる。

女性の潜在的起業希望者は若干の増加傾向にあるにもかかわらず、起業家に占める女性の割合は低下傾向にあり、1980年代から30年の間に10%超の減少をしている（図表3）。ただし、既婚女性で見ると半数が「自分で仕事を調節できる個人事業主」を希望しているというデータもあり（図表4）、起業は女性にとって魅力的な働き方の選択肢であると考えられる。

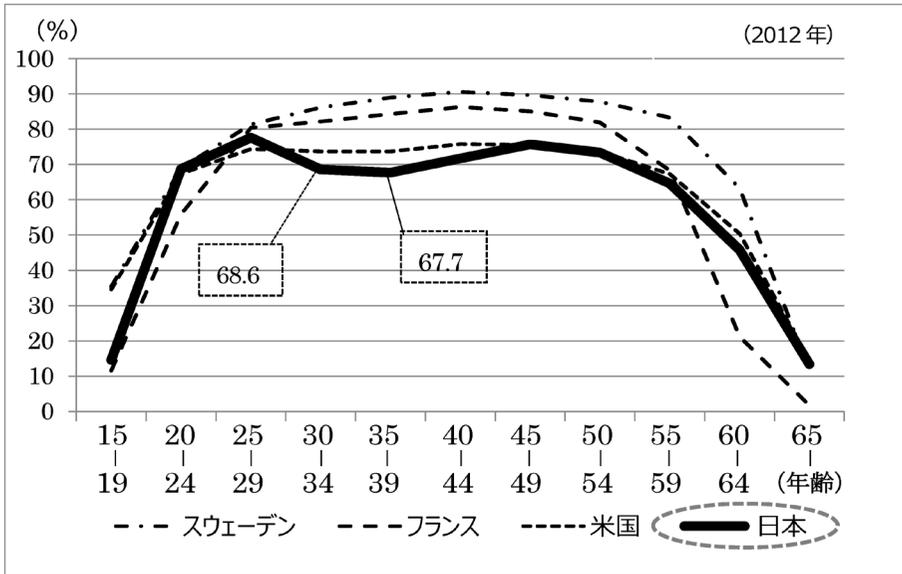
潜在的起業希望者が起業準備に着手していない理由については、女性の場合、起業を具現化するための相談相手がないことや相談する場所がわからないことが一因である（図表5）。

これらのことから、結婚や出産というライフイベントを抱えた女性が、多様かつ柔軟に働いていける環境を整備することは、地域社会において重要な課題であることがわかる。震災も相まって人口減少が進展している東北においてはなおさら、女性の起業による地域活性化は有意な選択肢であ

<sup>1</sup> 科学研究費助成（基盤研究C：26381166「被災地における中高年女性への起業支援手法の開発」、平成26-28年度、研究代表者：西口美津子）を受けた研究の一環である。女性起業家へのヒアリングをはじめ、中高年女性が起業に向けて能力開発を行うために必要な要件をアンケート調査によって抽出し、これに基づいてセミナーを実施した結果などを報告している。

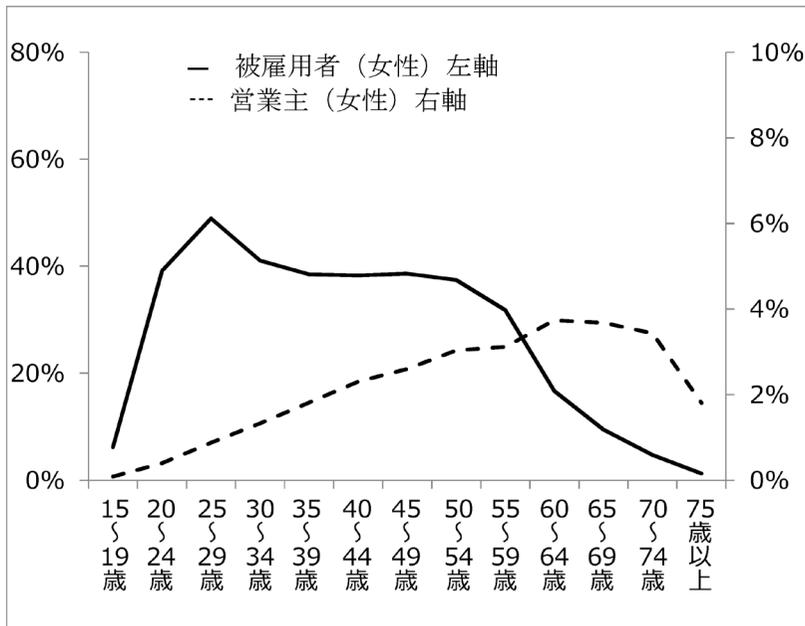
<sup>2</sup> 平成27年8月に『女性活躍推進法』が制定され、『日本再興戦略2016』においても、女性の活躍推進が柱となるなどの政府の動きからも、女性に大きな期待を寄せていることがわかる。

図表1：各国の年齢別女性就業率<sup>3</sup>



(出所) 経済産業省「企業における女性の活用及び活躍促進の状況に関する調査」(平成27年)、相楽(2017)講演内容データ

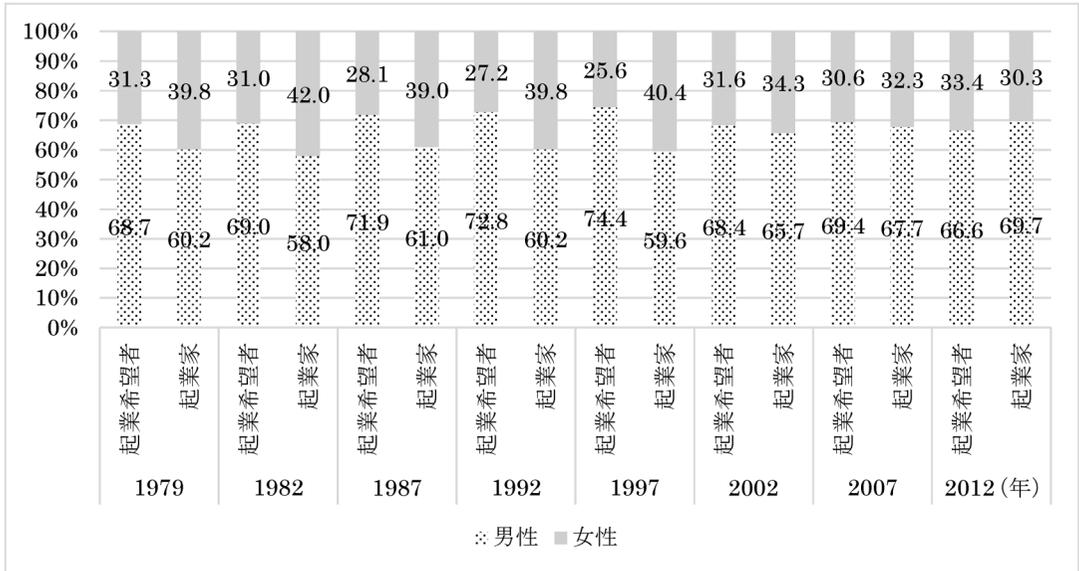
図表2：女性の職業別の就労率



出所：総務省「平成24年度就業構造基本調査」、相楽(2017)講演内容データ  
 ※「総数」に占める被雇用者及び自営業主の割合を示している。  
 ※ここでいう被雇用者は、雇用契約期間の定めがない者  
 ※また、自営業主には、内職者を含まない

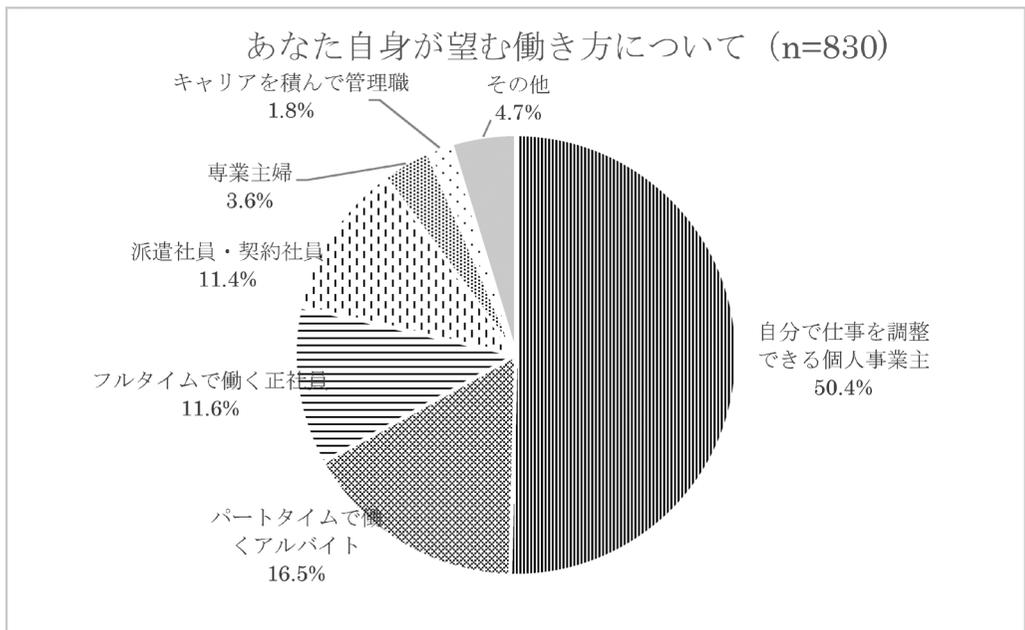
<sup>3</sup> 図表1から5は、2017年度宮城学院女子大学現代ビジネス学部シンポジウム『現代社会におけるビジネスと女性』(平成29年10月20日)の基調講演「経済産業省・東北経済産業局の役割と女性活躍推進について」と題する相楽希美東北経済産業局局長の講演内容からのデータに依っている。

図表3：起業家に占める女性の割合



出所：相楽（2017）講演内容データ

図表4：既婚女性の望む働き方



出所：ソフトブレン・フィールド調べ、相楽（2017）講演内容データ

るといってよいであろう。

図表5：潜在的起業希望者が起業準備に着手していない理由

	男性	女性
起業について相談相手がおらず、 情報入手先もわからない	4.2%	5.9%
自分のやりたいことをどうしたら 事業化できるか分からない	6.8%	15.2%

出所：平成25年度 日本の起業環境及び潜在的起業家に関する調査相樂  
(2017) 講演内容データ

## 2. マトリックス履歴書と起業家育成モデル

### 2.1. マトリックス履歴書による個人履歴の整理

筆者らは、これまでの活動において「マトリックス履歴書」<sup>4</sup>を用いて起業家の特性を探ってきた。「マトリックス履歴書」によれば、個人の来歴がどのように現在に生かされているかを複眼的に見ることが可能になる。

筆者らがインタビュー調査をした福島工業高等専門学校卒業の2人の女性の「マトリックス履歴書」の例を示す<sup>5</sup>。

図表6は、Kさんの「マトリックス履歴書」である。Kさんは、切り絵などを用いた暖かい作風で、雑誌『PRESIDENT』の表紙を飾ったことも有り、主に女性向け、児童向けのジャンルでイラストレーターとして活動している。Kさんの場合は、仕事を続ける中で自分の価値観を見つめなおし、夜学に通ってスキルアップして、自営で仕事を受注する道につながっている。

また、起業家ではないが、Fさんは、中学のころから英語に興味を持ち、向上すべく勉学を続けて、ワーキングホリデーや留学で学んだ豪州で永住権を取得した。現在監査法人に勤務して、会計士資格取得のための勉強も続けている（図表7）。

このように、「マトリックス履歴書」の形式は、横軸の1行目に年代を取り、次の期間の項目を追加的に記述しながら関連するキーワードを埋めていくことで、通常の履歴書にはない発見をしたり、自分の今後の可能性について客観的に考察することが可能である。

### 2.2. 起業家育成モデル

エドガー・H・シャインは、人の仕事に対する自己概念がキャリア選択を方向付けるアンカー（錨）になると位置付け、8つのカテゴリーに分類した（図表8）。シャインによれば、この「キャリア・アンカー」の8つのカテゴリーは、誰もがある程度の関心を持つものであり、その中にある「どうしてもこれだけはあきらめたくないと思う際立って重要な領域」<sup>6</sup>が、それぞれ個人がキャリアを選択していく上での基軸となる。ただし、筆者らは、このキャリア・アンカーを一生変えられない基準としてではなく、経験や年代によって変わることもあり得るものとして検討を続けてき

<sup>4</sup> 大野・西口（2013）

<sup>5</sup> KさんとFさんに対し、2014年にインタビュー調査を行った時点での内容である。

<sup>6</sup> シャイン；金井訳（2003, p.26）

図表 6：K さんのマトリックス履歴書

0～14 歳	15～20 歳 (福島高専コミュニケーション情報学科 1 期生)	21～27 歳 (就活、短期専門学校、就職)	28～29 歳 (退社、美術系夜間学校、派遣登録)	30～34 歳 (派遣の仕事をしながら自営)	35～36 歳 (イラストの営業、会社員との兼業)
絵を描く・読書が好き	英語・デザイン・パソコンなどを学ぶ	出版、制作の PC スキル・社会人としての基本の習得	デッサンなど 絵の基礎を習う	WEB、電子版の挿絵など	医療系の WEB の仕事など
	自分の持っている価値観に気づく	「すぐ使える」か「現場で役立つ」が判断基準に	自分にとって仕事とは何か、社会との関わりを考え直す	「楽しく、明るい気持ちになる」「わかりやすい」ものを作ろうと思う	確実に仕事になる分野＝自分の売りがわかる
		就活、出版会社に内定 上京	転職活動するも失敗	東日本大震災の経験	営業活動を重視
			イラストレーターを目指す	育児雑誌のカットで初仕事を担当する	ムックの表紙、雑誌の特集など任せられる
				切り絵の手法に手ごたえ	過去の仕事を見た顧客から依頼がくる
					雇用保険の受給を経て会社員との兼業

図表 7：F さんのマトリックス履歴書

0～15 歳	15～20 歳 (福島高専コミュニケーション情報学科)	20～21 歳 (休学してワーキングホリデー)	21～23 歳 (福島高専専攻科、東日本大震災)	24～26 歳 (豪州大学院、甘利島居会計事務所)	27 歳 (監査法人への就職)
豪州出身 ALT、学習塾で英語に興味	ラジオ英会話で成績向上ホームステイ(豪州)	豪州でワーキングホリデー、英語力の向上	TOEIC で表彰	If you don't ask, you don't get.	豪州での就職
	簿記 時事問題 アルバイト	日本語教師、レストランのアルバイト	会計学のゼミ	会計学専攻会計事務所での仕事経験	監査法人で業務、会計士資格取得のための勉強
		異文化の体験・理解	避難先で集団生活	ロータリー国際親善奨学生、将来の人脈作り	
			JICA インターンシップ 就職 (日本仲管)	日本仲管で通訳・翻訳 留学中の経済的サポート	
				豪州永住権の申請	豪州永住権の取得
					豪州での就職

ている。

筆者らは、歴史的起業家や、現在の起業家の特性を探るために、先に説明した「マトリックス履歴書」等により、これまで検討を続けてきた<sup>7</sup>。その中で、起業家として成功してきた人々に共通

<sup>7</sup> ベンジャミンフランクリン、福沢諭吉、津田梅子、石井筆子などの歴史的人材や、田原 (2014) が取り上げた若手起業家 (森川亮 (LINE 社長)、前澤友作 (スタートトゥデイ社長)、猪子寿之 (チームラボ社長) ほか、総勢 16 人) などについて検討を行ってきた。

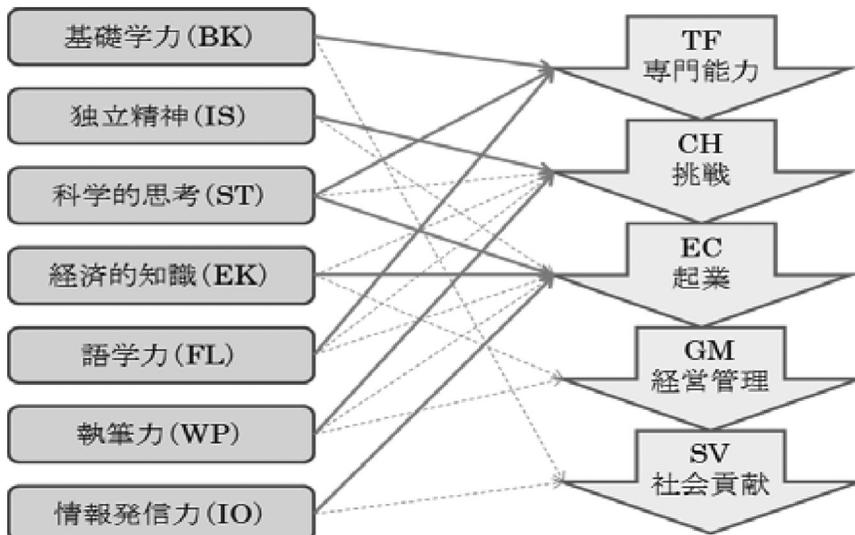
図表 8：キャリア・アンカーの 8 つのカテゴリー

No	名称	概要
1	TF：専門的・職能別能力 (Technical/Functional)	専門領域について挑戦しつづけることに生きがいを感じる。
2	GM：経営管理能力 (General Managerial)	組織の中で高い地位につき、経営管理能力を発揮する。
3	AU：自立・独立 (Autonomy/Independence)	自営業や自由業等、自立性の高い職務を選ぶ。
4	SE：保障・安定 (Security/Stability)	雇用の安定や職務の勤続等、常に安定を志向する。
5	EC：起業家的創造性 (Entrepreneurial Creativity)	失敗にもめげずに組織や企業を創造する。
6	SV：奉仕・社会貢献 (Service/Dedication)	世の中を良くすること、環境問題等に価値を見出す。
7	CH：純粹挑戦 (Pure Challenge)	困難を乗り越え挑戦したい。
8	LS：生活様式 (Lifestyle)	家族にも配慮し統合的にキャリアを構築して行く。

出所：シャイン（2003）より共著者編集

する、基礎学力をはじめとする 7 項目のスキルが抽出された（図表 9 左）。これらの項目と、エドガー・シャインのキャリア・アンカーが、図表 9 の起業家育成モデルのように組み合わせられることがわかった（大野ほか：2015）。すなわち、成功した起業家は、強弱と時間差はあれ 7 項目のスキルを備えており、キャリア・アンカーについては、専門能力を有し（TF）、新しいことに挑戦し（CH）、起業（EC）して、経営管理者になって（GM）社会貢献にもつなげていく（SV）という推移の一般性が見出された。

図表 9：起業家育成モデル



出所：大野ほか（2015）

以下、3.におけるアンケート調査で用いた調査票では、この起業家育成モデルを念頭に置き、キャリア・アンカーについての質問事項を設定している。

### 3. 「起業」と「能力開発」についての本学学生へのアンケート結果—西口ほか(2017b)との比較—

#### 3.1. 回答者の仕事とキャリアに対する意識

西口ほか(2017b)においては、中高年女性の能力開発コースのニーズを知るため、福島高専コミュニケーション情報学科の学生の保護者を対象に「社会人の『起業』と『能力開発』に関するアンケート調査票」に記入されたアンケート結果をまとめている<sup>8</sup>。アンケートは2015年の2月に行われており、対象者は15歳から20歳までの高専生の保護者の女性で、回答者は127人、うち40代が66.1%、50代が29.1%、両者を合わせて95.2%という年齢構成であった。このうち、専業主婦と休職中は合わせて11.8%であり、9割近い回答者が就業女性であった。

本節においては、この西口ほか(2017b)で得られた知見をもとに、宮城学院女子大学、現代ビジネス学部現代ビジネス学科の1年生に対して行った同アンケート調査と比較し、異なる視点からの考察も加えながら、「世代」による起業に対する意識の差異を検討する。この結果をもとに、起業家を育成するためには、どのような環境が整備されればよいかについて考察していく。

本学におけるアンケートは、2017年6月27日に実施し、現代ビジネス学科の1年生95名が対象であった。いわき市におけるアンケートの場合も、本学学生の場合も、仕事に対する意識において東日本大震災(2011年)の影響を無視することはできないであろう。現代ビジネス学部の1年生は、当時ほとんどが卒業を控えた小学6年生であった。

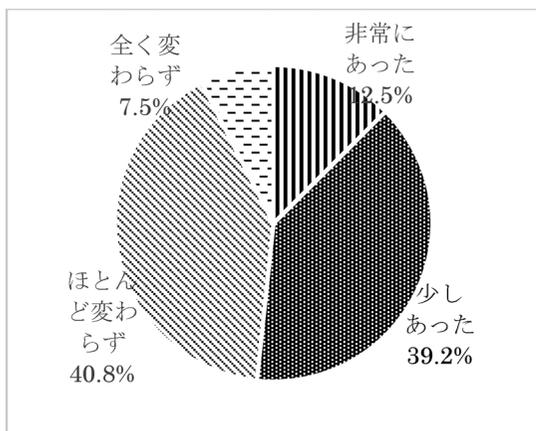
以下、いわき市の中高年女性を「中高年女性」、本学現代ビジネス学科1年生を「若年層女性」と称して説明を進めていく。

震災前後で仕事に対する考え方の変化について尋ねた結果が、それぞれ図表10および図表11である。中高年女性の回答者の過半数は、震災が仕事に対する考え方を変えたとしており(図表10)、若年層女性の回答においても「非常にあった」は少ないものの(4.3%)「少しあった」(50.0%)を加えると、54.3%が職業観に変化があったと答えている。この変化については、変化があったとする51名のうち、32名が自由記述欄にも回答している。その内容は、震災を機に「地域に貢献したい・地元で働きたい」(15名)、「安全や保障について考え直した」(5名)、「仕事とは何かについて考えた」(5名)など、職業について考える機会であったことがわかる。

職業観の変化は、キャリア・アンカーにも影響を与えている可能性があることが分かった。図表12と図表13は、築きたいと考えているキャリアについて、シャインのキャリア・アンカーから最大3つを選んでもらった結果である。若年層女性に特徴的なのは、「経済的な安定や保障を何よりも重視したい」という安定志向が一番多く見られたことである(62.1%)。安定(SE)と「仕事と家族との生活等のバランスを重視したい」という生活重視(LS)が半数以上見られる点は

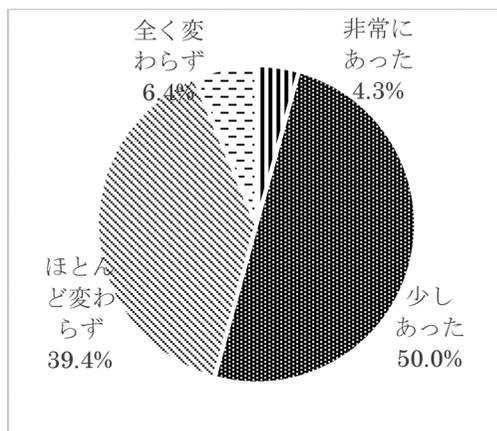
<sup>8</sup> 当時被災による住民の移動や生活基盤の立て直しが優先される中で、中高年女性にアクセスすることが難しかったため、同地域に居住する高専生の保護者を回答者にした(西口ほか:2017b)。

図表 10：震災後の変化（中高年女性）



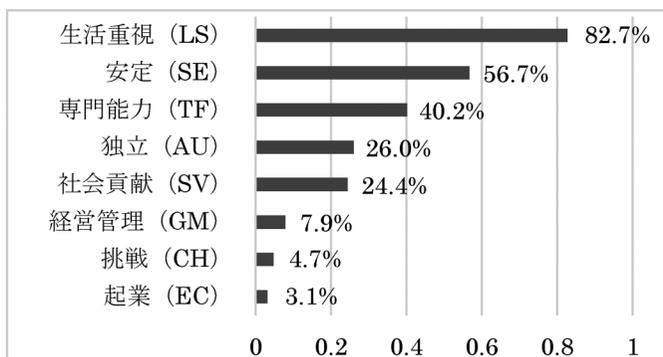
(回答者数：120)

図表 11：震災後の変化（若年層女性）



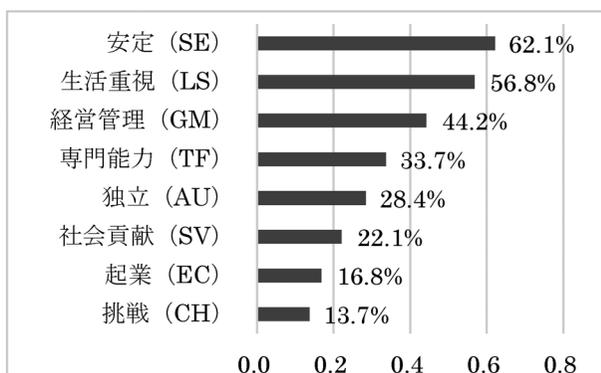
(回答者数：94)

図表 12：築きたいキャリア（中高年女性）



(回答者数：127)

図表 13：築きたいキャリア（若年層女性）



(回答者数：95)

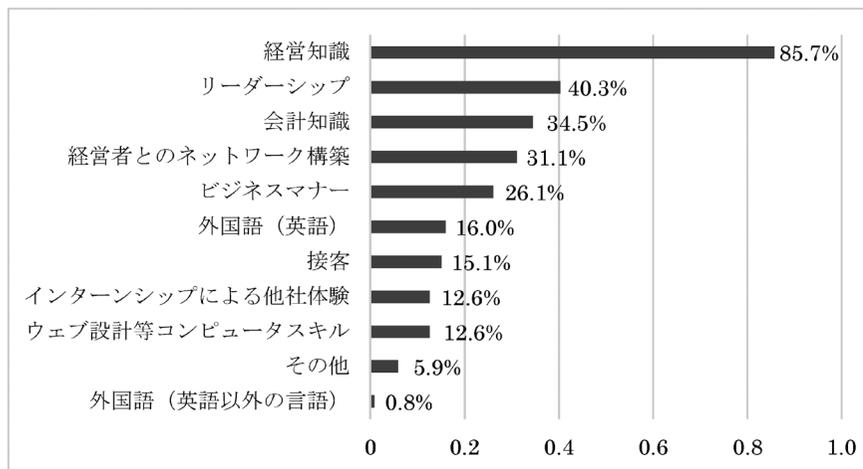
共通している。また、「多様な経験を積み、管理職等、組織の業績の向上に貢献したい」（経営管理、GM）の数值が、中高年女性（7.9％）に比べて、44.2％と非常に高い。若年層女性の方が、割合は低いものの、起業（EC、16.8％）や挑戦（CH、13.7％）の数值が高い。

職業観の変化とキャリア・アンカーの関係では、若年層女性のうち、起業（EC）を選択した16人のうちの14人（87.5％）および、経営管理（GM）を選択した42人のうち26人（61.9％）は職業観が変わったとしていた。このことから、震災を経験したことによって、組織の長を目指したり起業してリーダーシップをとることに目覚めた若年層が一定数居ると考えられる。

### 3.2. 起業に必要な能力開発

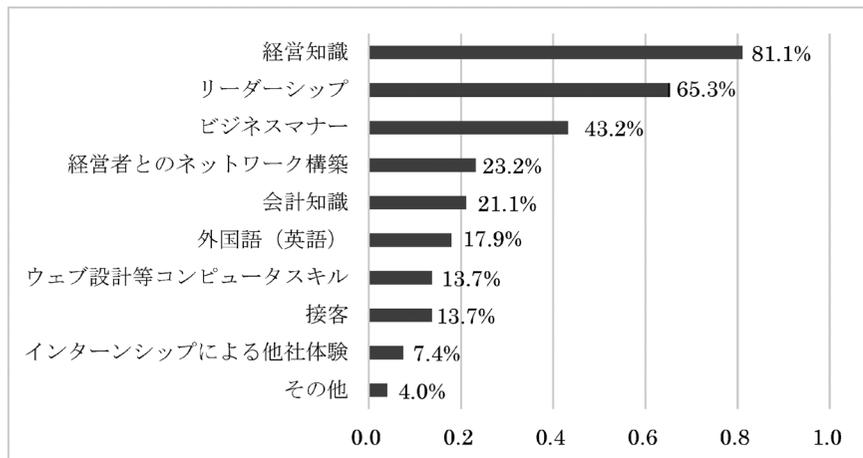
一般的に、起業を行うのに必要と思われるスキルについて尋ねた回答が、図表14と図表15である（最大3つまで回答）。

図表14：一般的な起業に必要なスキル（中高年女性）



(回答者数：119)

図表15：一般的な起業に必要なスキル（若年層女性）

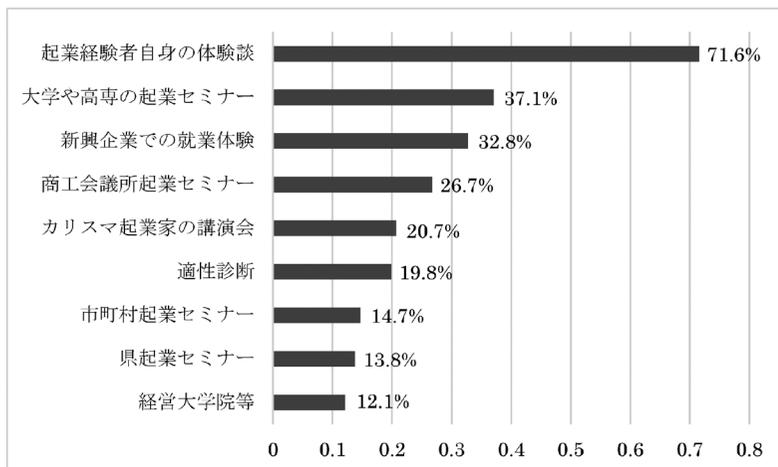


(回答者数：95)

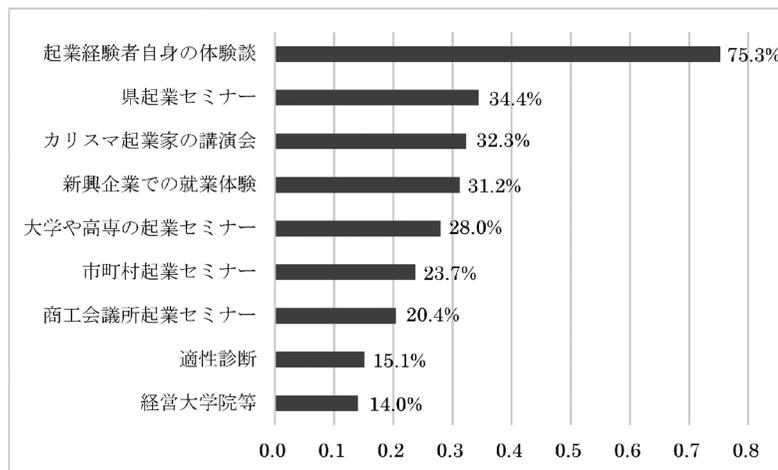
若年層女性は、一般的に起業する場合に、経営知識とリーダーシップが必要と考えており、リーダーシップの割合は、いわき市の中高年女性に比べて25ポイント高い（図表15、65.3%）。また、ビジネスマナーが大切であると考えている割合が、中高年女性に比べて17.1ポイント高く（図表15、43.2%）、3位である。アルバイトなどを通して、社会の入り口にいる若年層女性にとって、ビジネスマナーはこれから身に着ける素養としてハードルの高いものであると考えられる。会社の設立には、経営知識とリーダーシップが必要と考えていることがわかる。

起業に役立つ能力開発の場として、最大3つを選択してもらった結果が図表16と図表17である。双方とも「起業経験者自身の体験談」の割合がずば抜けて高く、未知の世界に踏み込む前に先例となる体験者談を聞きたいという気持ちは、年齢に関係なくあることがわかった。若年層女性の第2位は「県起業セミナー」（図表16、34.4%）であり、これには若年層の居住地である仙台の立地が関係していると思われる。仙台市は宮城県の県庁所在地であることから、宮城県主催のイベン

図表16：起業に役立つ能力開発の場（中高年女性）



図表17：起業に役立つ能力開発の場（若年層女性）



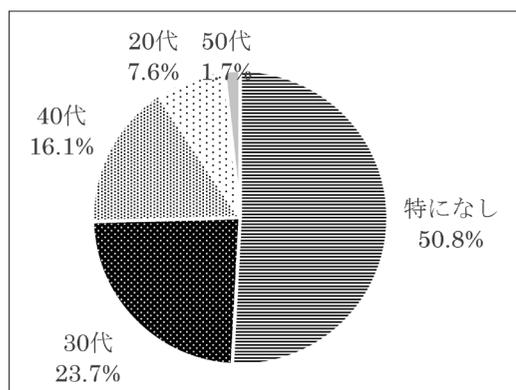
トは仙台市で行われることも多く、県の起業セミナーなら立地的にも出席しやすく内容的にも信頼度が高い可能性がある。中高年女性の居住地であるいわき市の場合、浜通りの中心的な都市の一つではあるが、中通りの福島市が県庁所在地であり、また、いわき市の中における大学や高専への信頼度が高いためと考えられる。

若年層女性は、「カリスマ起業家の講演会」の順位とパーセンテージも高く（図表 17、32.3%）、図表 15 での「リーダーシップ」の数値の高さと考え合わせると、起業家はカリスマ性や強いリーダーシップを持つ必要があると感じていることがうかがえる。また、実体験に基づく説明を聞くことが、起業についての能力開発に役立つと考えていることがわかる。

起業に適切と思われる年齢を聞いた結果が、図表 18 と図表 19 である。起業にふさわしいと考えている年代について、双方の調査とも、「特になし」という、年代は関係ないとする回答が最も多かった。「やろうとする意志」や「熱意」、「知識」などがあれば、年齢は関係ないとする意見が大半であった。起業は、個人のモチベーションや能力によるものとする考え方であると思われる。

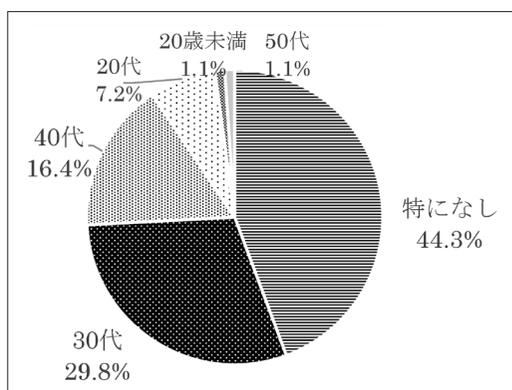
中高年女性からは、20代・30代は子育てとの両立を懸念するコメントが多く見られたが（西口ほか；2017b）、若年層女性の結果では、30代の起業を3割が支持している（図表 19、29.8%）。30代と回答した29人のうちの26人の自由記述欄には、30代は「知識と経験」を積んだ年齢であり、「ある程度のお金」もたまったちょうどよい年齢であるとの記述がほとんどであった。中高年女性の回答者にとって、30代は子育てで大変だった過去の記憶であり、現在10代の若年層女性にとっては10数年後の姿であることから、自身の30代を理想的に投影している可能性がある。

図表 18：起業に適切な年齢（中高年女性）



(回答者数：118)

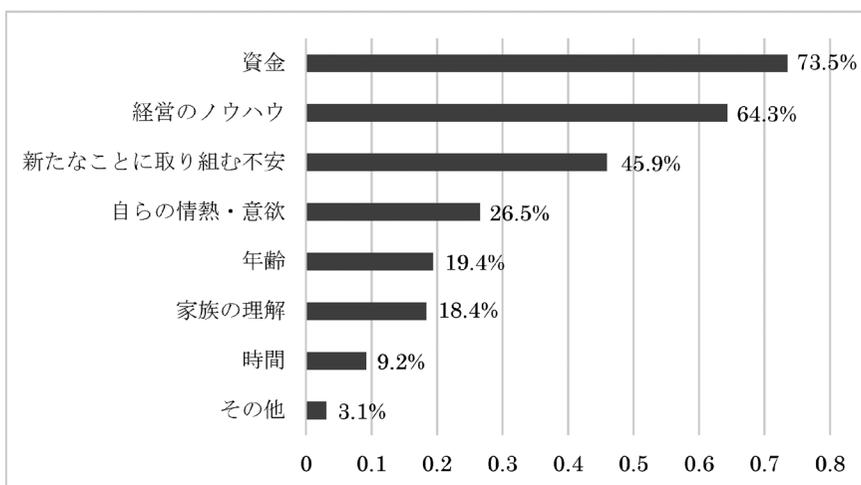
図表 19：起業に適切な年齢（若年層女性）



(回答者数：95)

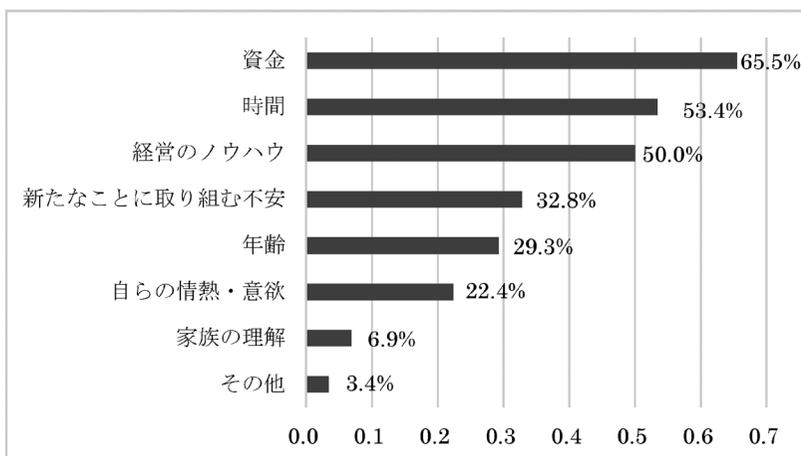
起業するうえでの障害となるものについての回答が、図表20と図表21である（最大3つ回答可）。どちらも「資金」が第1順位に来ており、起業するにはお金がかかるとの認識が大であることがわかる。特に差が出たのは「時間」についてであり、中高年女性にとっては9.2%（図表20）であるが、若年層女性にとっては53.4%（図表21）が障害となると回答した。すなわち、勉強、部活、アルバイトなども学生生活と平行して起業を考えるには時間が足りない、と考えていると思われる。

図表20：起業するうえでの障害（中高年女性）



(回答者数：98)

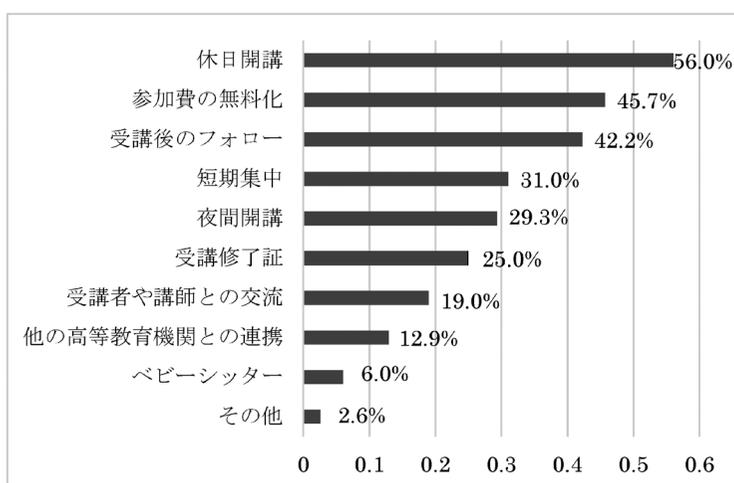
図表21：起業するうえでの障害（若年層女性）



(回答者数：58)

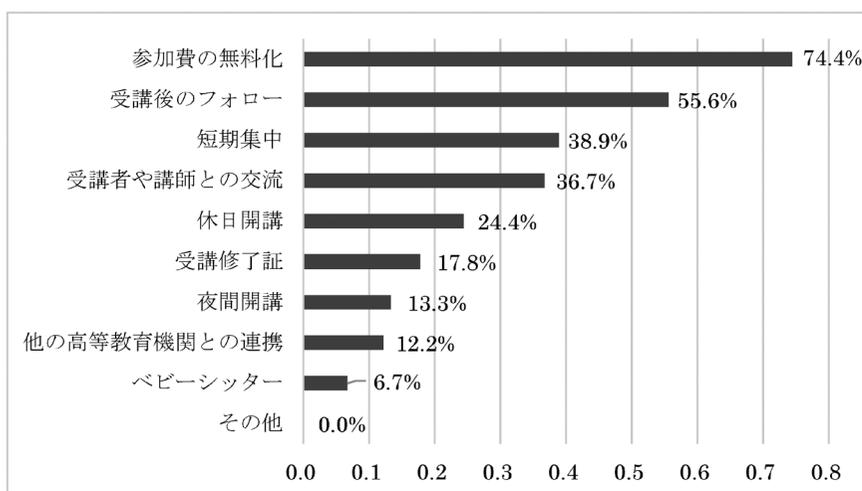
図表 22 と図表 23 が示しているのは、能力開発コースを開催するために必要な項目について尋ねたものである（最大3つまで回答可）。若年層女性の74.4%は、「参加費の無料化」と回答しており、10代の金銭感覚ではお金を払って受講するのはハードルが高いようである。中高年女性の回答で高かった休日開講と夜間開講（図表 22、56.0%と29.3%）が、若年層女性では、24.4%と13.3%（図表 23）となっており、若年層女性は、休日や夜間でなくとも受講する時間の調整ができる、もしくは休日や夜間の時間帯を受講に充てたくない、と考えていることがわかり、社会人と学生の時間に対する感覚と自分のために使える時間の違いが表れている。また、「受講後のフォロー」（55.6%）や「受講者や講師との交流」（36.7%）の数値も高く、学生は起業について周りに相談できる環境を求めていると考えられる。

図表 22：能力開発コースの必要事項（中高年女性）



(回答者数：116)

図表 23：能力開発コースの必要事項（若年層女性）



(回答者数：90)

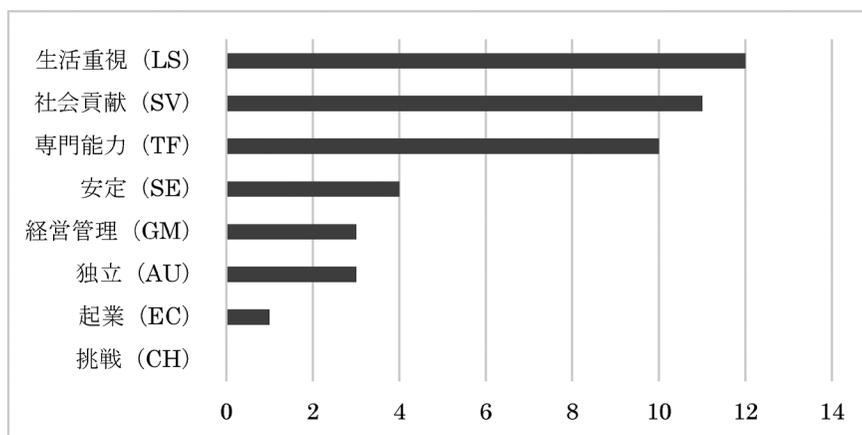
#### 4. 宮城学院 OG からの意見

宮城学院女子大学に現代ビジネス学科が開設されたのは2016年4月であるが、宮城学院には、131年の歴史があり、ビジネス系の学部学科がない時代から、たくさんのOGをビジネスの世界に輩出してきた。卒業時は意図していなかったとしても、結婚を機として配偶者とともに経営に携わった卒業生もいれば、自ら事業を立ち上げたり、社会的に活躍をしている方も多し。OGには様々な形で母校に貢献していただいているが、系統立ててビジネスの面におけるその声を教育に反映する機会がなかった。このたび、宮城学院同窓会に紹介を依頼し、OGに対しても先の内容とは若干質問内容に変更を加えたアンケート調査を行った。その結果、52名中15名からの回答を得た。50代から70代までを中心とする年齢構成であった<sup>9</sup>。

職業は「教育・学習支援業」が最多で10名、建設業2名、農林水産業1名、製造業1名、卸売・小売業1名、学術研究、専門・技術サービス業1名、医療・福祉1名、主婦1名の構成であった<sup>10</sup>。また、現在の立場に就いてからの年数の平均は27.8年であった。

図表24は、OGが築きたいと考えてきたキャリアについての回答である（最大3つまで回答可）。第1順位が「生活重視」(LS)である点は、図表12で示したいわき市の中高年女性の場合と同じである。社会経験を有する女性にとって、仕事を続けるうえでは家庭との両立が大きい課題であったことは、間違いのないであろう。

図表24：築きたいと考えてきたキャリア (OG)



(回答者数：15)

<sup>9</sup> 年齢構成は、40代2名、50代4名、60代5名、70代4名であった。また発送の内訳は、同窓会支部長20名、理事会メンバー22名、同窓会OG10名であった。2017年10月16日付で発送し、11月6日までの受付をもってまとめた。OGに対しては、現在の学生に対するコメントや意見などの質問項目を追加している。15名の卒業学科は、国文学科2名、日本文学科2名、保育科2名、家政科3名、英文学科2名、音楽科3名(以上短期大学を含む)、高校1名であった。なお、本節においてのグラフは、対象人数が15名であることから、%ではなく人数で示す。

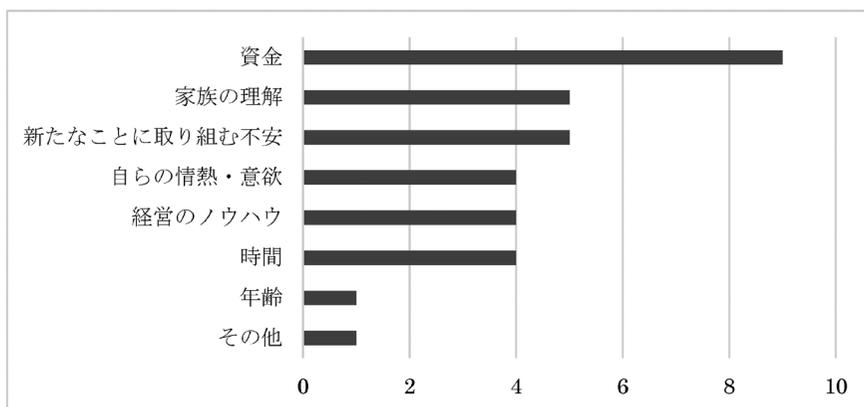
<sup>10</sup> 合計が15名を超えるのは、複数の仕事を抱えている方がいるためである。また、現在主婦の1名がどの分野の職業だったかについては不明。

ここで興味深いのは、第2順位の「社会貢献」(SV)と第3順位の「専門能力」(TF)の数値の高さである。社会貢献(SV)は、11名(73.3%)が、専門能力(TF)には、10名(66.6%)が築きたいと考えてきたキャリアとして回答を寄せており、経営や指導的な立場に長く就いて来られたOGの方々の意識がうかがえる。また、図表9の起業家育成モデルにおけるキャリア・アンカーにおいて最終段階と位置付けた「社会貢献」が意識されてきた、というところにOGの特徴があると考えられる。

起業にふさわしい年齢については、「特になし」(8名)が多く、「30代」と「40代」がそれぞれ3名ずつであった。MGU1年生の回答との違いは、OGは30代や40代に対して「体力」や「気力」の充実を理由に挙げていることである(4名)。育児や家庭の仕事などで大変な時期ではあるが、体力・気力がある時期でないとは起業には向かないことを、実感としてとらえていることがわかる。

「起業するうえでの障害」への回答が図表25である(最大3つまで回答可)。「資金」が第一順位であるのは、先の図表20・図表21と変わらないが、「家族の理解」(5名)と「新たなことに取り組む不安」(5名)についての回答数が多い。これは、家族を持つ女性が起業するうえで、なるべく現状を維持しながら、家族とも相談して理解を得ながら進めていく、もしくは進めてきた表れであるとも考えられる。

図表 25：起業するうえでの障害 (OG)



(回答者数：15)

このほか、OGからの自由記述の内容には、後輩に向けての期待が込められている。

宮城学院で学んだことで、現在も仕事の中で活かされていることとしては、「人生を豊かに」考えられるようになった、すべてのことに「いつくしむ心」を持てるようになった、「常に相手の立場になって物事を考えることができるようになった」、「独立心」、「天に恥じない生き方」などが挙げられている。クリスチャンであるか否かにかかわらず寄せられたこれらの言葉は、すべての学生における学生生活上の指針になりうる。

また、在学時に現代ビジネス学科があったら学びたかったこと、現在の学生へのコメントについても書いていただいた。「積極的」、「挑戦」、「いろいろな経験をしてほしい」などのエールとともに

に、女性という視点から「女性ならではの細やかな視点と発想で大いに活躍してほしい」、「夫の事業、子供、親の介護など、自分の思うようにいかないことが多いから、柔軟に対応できるように」という女性が直面するであろう課題への示唆と、「ライフイベントごとにキャリアを組み換えられる」という逆転の発想も寄せられている。ライフイベントをどのように過ごすかは、時代・年代を問わず主に女性に課せられてきた課題である。今後どのように解決していくのかは、社会全体の問題でもあり、必ずしも女性だけの問題ではなくなっているが、個々人の選択がスムーズにできるようにならないと解決とは言えないであろう。

## 5. 世代の違いによるアンケート結果の総括

以上、3.と4.において3つのアンケート調査結果に関しての解釈を試みた。「中高年女性」の回答で特徴的なのは、キャリアを考える視点において「仕事と家族とのバランスを重視」（生活重視、LS）したうえで、「経済的な安定や保障」を重視（安定、SE）している点である（図表12）。また、起業に関しては、経営知識（図表14）や起業経験者自身の体験談（図表16）が重要と考えており、起業するうえでの障害として「経営のノウハウ」の順位が高いなど（図表20）、経営そのものに対する知識の習得が不可欠であると考えていることがわかる。セミナーの休日開講についての希望も多かった（図表22）。

これに対して、「若年層女性」は、「起業」（EC）や「経営管理」（GM）をキャリア・アンカーに挙げる割合が「中高年女性」よりも多く（図表13）、30代について「知識や経験」を積み、「蓄財」ができていく年代であるとの期待がうかがわれた（図表19）。起業するうえでの障害では、「時間」についての意識が高く（図表21）、セミナー受講に関しては、「参加費の無料化」が最多であった（図表23）点も特徴的である。

OGに関しては、ばらつきはあるものの平均年齢が一番高いと考えられる。サンプル数は少ないものの、最も特徴的であったのは、「社会貢献」（SV）をキャリア・アンカーに挙げた人数が多かったことである（図表24）。この結果が、年齢的なものであるのか、職業分類上の偏りによるものなのか、または宮学OGであるからなのかについては客観的に判別すべき材料がなく、おそらくこれらの複合的なものであると思われるが、今後検討するに値する点であると思われる。

## 6. 起業家育成のための能力開発を促進するための環境

中高年女性へのアンケート調査をもとに行った、若年層女性と、OGへの調査結果からは、起業に関して「資金」、「時間」、「相談」という3つのキーワードが浮かび上がってくる。この点を中心に、若年層女性に対し、今後どのような起業家育成のための能力開発を促進する環境を整えられるかについて、以下考察する。

現代における起業「資金」は、必ずしも自己資金ではない。クラウドファンディングなど、担保を持たず、また金融機関等の審査を経ずとも、不特定多数の出資者から資金を集めることができる

時代になってきている。もちろん、これに伴うリスクについての知識が必要ではあるが、資金面での起業のハードルは下がっているといえるであろう。

「時間」については、『経営』について、多方面のことを学んだりするための時間、現在の学生生活をしながらそのための時間を捻出する難しさが関連しているように思われる。「相談」は、起業についての質問、悩み等を相談する相手や場所を持っておきたいという気持ちの表れとも言える。若年層の学生世代にとっては、これからが学びの場であり、時間である。学生生活を通して、経営について学び、そのために必要な行政機関についての知識も蓄積していくことは十分可能である。このように「資金」、「時間」、「相談」という起業についてネックになりうる要素は、今後様々な形で解決していくことが可能である。

この若年層を現代ビジネス学科の1年生に置き換えて考えてみても、これから専門的に経済学や経営学、地域に関し学習できる時間が豊富にある。学科のシンポジウムや様々な講演会、学外での学習等を通して、起業経験者の体験談を聞く機会も今後ますますあると思われ、起業や経営に関する知見やネットワークを広げていくことが可能であると考えられる。

また、「今後地域に必要なと思われるビジネス」についてOGに尋ねた回答として、「高齢者に対するきめ細かいサービス」の提供<sup>11</sup>、「高齢化核家族化」に対応するための男性の料理教室、「高齢者のための介護や買い物代行」など、高齢者にかかわるサービスを提供する案が多く見られた。現実には地域が抱えていく問題であり、「地域のお年寄り、信用を重視するので、MGUの学生の企業グループと知れば長期で契約すると思う」という意見は、今後の地域に根ざした仕事探しという点で、有用な視点となろう。

本学にはすでにOGを対象とした人材バンクも存在するが、その有効的活用や、OGの体験を学生に体系的に生かしていけるような組織作りも望まれる。

## むすび

現代を生きる女性が直面するライフイベントに関する課題は、将来が100%見通せない限り、現在時点で解決はできない。しかし、人生の節目ごとに柔軟な発想と対応ができれば、より自分をステップアップしていける可能性がある。今回、本学現代ビジネス学科の学生に対して行ったアンケート調査の回答の特徴として、震災により仕事に対する意識が変わった学生は、「起業」や「経営管理」をキャリア・アンカーとして考えている割合が高いことが分かった。また、30代について、社会人としての経験を積み、将来を見通すことができる年齢で、起業する意思があればそれなりの貯蓄もある年代ととらえている学生が多いことが分かった。

女性の社会生活を考えるうえで、起業は大きな一つの選択肢であり、起業についての知識を学生時代に得ておくことはその選択肢が現実的になることを後押しするであろう。本学の学生には、これからの社会に必要とされる領域の仕事に、果敢に挑戦してほしいと考える。

---

<sup>11</sup> 行政のサービスが対応できていない、雪かき、草取り、庭掃除などを有料で、という提案。

謝辞：本研究のアンケート調査にあたって、代行発送していただいた宮城学院同窓会には厚く御礼申し上げます。また、アンケートにご協力いただいた宮城学院 OG の方々に、心から感謝申し上げます。紙面の関係上、残念ながら本文中では取り上げることが出来なかった、たくさんのコメントにつきましては、授業等を通じて本学学生に伝えていきたいと思っております。

## 参考文献

- 西口美津子・渡部美紀子・大野邦夫・芥川一則（2017a）『女性のための起業マニュアル—未来は自分で切り開く—』福島工業高等学校ビジネスコミュニケーション学科。
- 西口美津子・渡部美紀子・芥川一則・大野邦夫（2017b）「中高年女性の起業家育成に向けた能力開発コースの検討」『教育産業学研究』第47巻第1号：21-28.
- 大野邦夫・渡部美紀子・西口美津子・末永早夏（2015）「異文化交流スキルを有する女性起業家に関する研究」情報処理学会研究報告，2015-DD-97: 1-8.
- 大野邦夫・渡部美紀子・西口美津子（2014）「工業化および情報化を背景とする社会的起業家人材の育成」第1回画像関連学会連合会大会：1-8.
- 大野邦夫・西口美津子（2013）「マトリックス方式による職歴情報の評価とキャリア設計の検討」情報処理学会研究報告，DD89-7: 1-8.
- 相樂希美（2017）「経済産業省・東北経済産業局の役割と女性活躍推進について」，2017年度宮城学院女子大学現代ビジネス学部シンポジウム『現代社会におけるビジネスと女性』基調講演（2017年10月20日）.
- Schein, Edgar H., 金井壽宏訳（2003）『キャリア・アンカー，自分の本当の価値を発見しよう』白桃書房.
- 田原総一郎『田原総一郎×若手起業家 企業のリアル』（2014）図書印刷株式会社.

# Promoting Skill Development for Women Entrepreneurs

**WATABE Mikiko**  
**NISHIGUCHI Mitsuko**  
**OHNO Kunio**

The expectations of regionally-rooted entrepreneurs are high in an era when consumer needs and corporate business models are changing and a declining birthrate and increasing aging population in present-day Japan show no signs of abating. Many women have to abandon their careers after marriage or childbirth, so there is a large pool of potential women entrepreneurs.

In this study, a questionnaire on “entrepreneurship and skill development” was administered to first-year students in the Contemporary Business Department of Miyagi Gakuin Women’s University. The author of this paper and her colleagues extracted features of students’ entrepreneurial awareness.

Entrepreneurship is one option among many choices that a woman can take during her life. By acquiring knowledge about entrepreneurship while a woman is still a student, she can be encouraged by the fact that becoming an entrepreneur can be a realistic goal for her. Analysis of the questionnaire data shows that it was the factors “funds”, “time”, and “consultation” that would be a bottleneck in entrepreneurship. In this paper, I showed that it is possible to overcome these obstacles. I hope that the university students boldly take on the challenge of work that is necessary for our future society.